

他者との関係性を生きる

和才恵理子

はじめに

2017年6月にひとりの歌人が歌集『滑走路』を遺し、世を去ったことを新聞報道で知った。享年32歳、歌人萩原慎一郎は、中学時代のいじめで受けた心の傷から病となり、生涯癒すことはできなかった。

傷ついてしまった心にふつふつと湧き上がる思いを歌うことで彼は生きてきた。時には自らを鼓舞しながら。

きみのため用意されたる滑走路きみは翼を手によればいい
自由な空よ 自由ではないこの街ではくはあなたを探しているよ¹⁾

それでも、精神の不調は彼を凌駕し遠くへ連れ去ってしまったのだった。私は彼が亡くなってから半年余りも過ぎ、彼の詩集『滑走路』が出版されたとの新聞報道まで、いじめから受けた心の傷を持ちつつ非正規で働き、恋をして、世の中の底辺から歌を詠み続けてきた彼の存在を知らなかった。

牛井屋頑張っているきみがいてきみの頑張り時給以上だ
東京の群れのなかにて叫びたい 確かにぼくはここにいること¹⁾

そうなのだ、東京の群れのなかで、私は慟哭しているひとりの若者の存在に気付かなかった。私の日常は、実は彼も含めた多くの非正規の人の働きで成り立っているにもかかわらず。

職業訓練法人で働く私は、非正規で働く若者が増えていること、非正規